展覧会ファシリテータ ケエジンの活動

ケエジンとは？

ケエジンは、この展覧会のために作られた荒木珠奈さんの新作《記憶のそこ》から生まれた12種類の精霊（キャラクター）です。作品の形のモチーフである「cage（ケージ）」と「人（ジン）」を組み合わせた名前で、会場のあちらこちらに存在し展覧会を案内する精霊としてポスターやチラシ、会場サインなどにちりばめられていました。

この名前にちなんで、展覧会ファシリテータも「ケエジン」という愛称で活動しました。作品と鑑賞者をつなぐ役割として、さまざまな場面で鑑賞体験をサポートする存在です。来場者と作品とのよりよい出会いの場をつくり、展覧会をそれぞれが楽しめるような状況をつくることで、作品を介して創造的な関わりを育むことを目指しました。

この展覧会では、71日間の会期を通して、180名を超えるケエジンが活動しました。メンバーには、とびらプロジェクトで活動するとびラー、3年間の任期を満了したとびラー、一般公募の方を含み、18歳から70代の方まで、様々な方が対話を通した鑑賞の場づくりに取り組みました。

会期中のケエジンの活動

（開室前）9:00-9:30　朝のミーティング

その日に美術館で予定されているプログラムや、連絡事項の共有をして、会場の担当ポジションを決めます。活動スタートの合言葉は、「うえののそこから…はじまり、はじまりー！」

（開室中）9:30-17:30　それぞれのギャラリーにわかれて来場者をお迎え

◎ 1章・2章　ギャラリーC

メキシコや日本の風景を題材にした作品から、主に参加型インスタレーションでの体験を安全に配慮しながらサポートしました。

◎ 3章　ギャラリーB

作品からひろがる様々な物語を想像したり、みる人の記憶や経験が語られるのを聞いたりしながら、版画や立体の作品をともに鑑賞しました。

◎ 4章　ギャラリーA

インスタレーション作品《記憶のそこ》の鑑賞をサポートしました。

（閉室後）17:30-18:00　ふりかえり

来場者との出会いから生まれたエピソードや、作品を鑑賞しながら気が付いたこと、安全な場づくりをするための工夫など、その日に起こった出来事についてふりかえります。

● 掲示板

ふりかえりで記入したホワイトボードは、ケエジン専用のウェブサイト「ケエジンのケエジバン」に投稿。その日の活動メンバーだけでなく、180名を超えるケエジン全員で内容を共有し、コメントで気が付いたことを書き込むことができます。展示室とオンラインでの交流を重ね、日々の活動がつくられていきました。

● ケエジン鑑賞会

開館前・閉館後の展示室で、毎日10分ほどの鑑賞会を開催。鑑賞を豊かにサポートするには、まずは自分たち自身が作品を楽しむことから始めるのが大切であると考え、来場者のいない空間で、ゆっくりお話ししながら作品を味わい、各人の気づきを共有しました。

ファシリテータ運営：一般社団法人アプリシエイトアプローチ

朝のミーティング

《Caos poetico（詩的な混沌）》

《うち》

ギャラリーBでの作品鑑賞

ケエジン鑑賞会

展覧会ファシリテータ「ケエジン」の とっておきエピソード

“Keijin” Facilitator Accounts of Their Interaction with Viewers

展覧会ファシリテータ「ケエジン」のとっておきエピソード

展覧会ファシリテータ「ケエジン」が日々活動するなかで、たくさんの来場者との出会いがありました。その中から、「とっておき」のエピソードを紹介します。

《Caos poetico（詩的な混沌）》をじっくり味わってくれたお姉さん。「私、メキシコに行ったことはないんですけど…本当にメキシコに来たみたい！旅している気分です」とお話ししてくれました。「こういう風にお話ししながら、展覧会を楽しめるって初めてです。いいですね！」とも言ってくれましたよ。嬉しいですね。

（大石麗奈）

《遠野物語》
引き出しの文庫本を見た後に、徐々に山の中からひかり出てくる動物たちを見つけ、
「だから遠野物語なんだー！」
と、つい？大きな声に出してしまった様子の40代くらいのスーツをお召しの男性と「遠野物語って、どんな人や動物か出てきたか？」をしばらくお話しました。
河童や、妖怪について話が及び、
「小さい頃の思い出が懐かしくなる場所ですね。日本のむかし話のワンシーン（土曜日の夜に放送されていたアニメ）を思い出して、ホッとします。」
と言葉をいただきました。私も《遠野物語》を見ていると、あの音楽が頭を巡ります。

（西内るみ子）

《Caos Poetico（詩的な混沌）》で満面の笑みのカップルが話しかけて来ました。
彼らはメキシコから日本へ遊びに来ていて、この辺りを散歩していたところ《Una marcha de los esqueletos（ガイコツの行進）》のポスターを見かけ、「なになに!?」とやって来たそうです。「この光景（《Caos Poetico（詩的な混沌）》）も、この舟（《道》）も、この砂漠も、マゲイ（竜舌蘭）も、死者の日のガイコツの行進も、私たちにはポピュラーなのです!! まさか日本でこんなにも私たちに身近な場面に遭遇できるとは思ってもいなかった!!」と大興奮されていました。更に、彼らはメキシコシティでゲストハウスを経営していて、何と！その名がカーサ マゲイ!!
「これ、これ!!」と、何枚かのマゲイの版画作品を指差しながら説明してくれました。
その後《うち》では、“鍵を渡される”というゲストハウス経営の彼らの現実とは逆の体験も楽しんでいました。

（横山由美）

最終日、男性お一人でいらしていた方。
《記憶のそこ》で声をかけてどの作品がすきでしたか？と聞いたところ、赤い手がたちふさがっている《夜の芯》をあげてくれました。

赤い服の女の子は赤い手という困難？試練？に立ち塞がれて、すごい向かい風の中で立っている。
空に浮かぶ星の様なもの。
それに視点が注がれ、目標のようなもの。
女の子の赤と星の赤は種類が似ているが、
手の赤は濃淡があり、何か怖さを感じる。
指の形のせいか？節がないようなぬるっとした指。
爪もより赤く尖っている。
そしてそのタイトルを《夜の芯》と表現することもすごい。
「夜の芯」とはどんなものなのか？
夜が元々持っている本質的なもの・・・。
でもそんなに悪いものな気はしない。
今日はそう思った。でも明日になると違うかも。
自分の今の状態によって違うのかも。
感じ方がいろいろでその日のコンディションで違うかも知れない。

1人でじっくり見ていたので、話しかけたら、嬉しそうにどんどん思いが溢れてくるようでした。

（今井加奈子）

《本の中劇場》をのめりこむ様に覗き込んでいるご婦人。
どんなことを感じました？とお聞きしたところ、「オーナメントが飾られたり椅子が宙を舞っていたり、華やかな劇場のカーテンが開いている一見にぎやかそうな様子ですが、寂しさを感じる。」とのこと。
そこに人が見えない為かもしれません。
「でもよく見ているうちに、宙に飛んでいる椅子から人の気配を感じて、かつて子供たちが、賑やかに遊びまわっていた様子を思い描けました。でも劇場の奥の壁には、文字がびっしり書かれているので、そこからこれは、文章で書かれている世界、実在の世界ではなくて、本を読んで、頭の中に描かれてくる世界ではなかと思い、推理する面白さを感じました。」とのこと。
推理しながら、作品一点一点を見ていくと、果たして何回通えば見切れるのか不安になってきたそうです。半分おどけて、あと半分は真顔でおっしゃっていたあのご婦人。会期中に見切れたでしょうか？

（荒井茂洋）

《うち》にいらした一人の女性のお客様。
鍵をお渡ししたら「えっ！」と驚かれていました。なぜかと理由をお聞きしたところ、お渡しした鍵の番号が、一人暮らしをしている息子さんのお部屋の番号と同じだったそうです。もちろん、偶然ですが、渡した私もびっくり。
その後、じっくりそのお部屋を見ていかれました。きっと、珠奈さんのお部屋を通じて、離れて暮らす息子さんの姿を見ていたのではないでしょうか。
その日一番の出来事でした。

（猪狩麻里子）

ふだん外出の少ないシニアのお母様と来場された娘さんのお二人と《うち》を鑑賞。作品の見え方が色々あるということを楽しんで下さいました。
過去にメキシコに旅したこと等を思い出したようで、たくさん話して下さいました。「こんな冒険もあるのね、今日は来てよかった」と言ってくださり、自分もこの方からお話を聞けてよかった、と思いました。

（富岡智子）

平日朝いちばんにいらした男性のお客さま。
《うち》でお話ししていたら、
「じつは今日キツくて会社休んでここにきたんです。」
何が受け取れるかわからないけど、じっくり見てゆっくり感じたいなあという話をしました。
その言葉のとおりじっくり見てくださっているなあ、と思っていたのですが、お帰りの時に話かけられなくて残念。
その時の思いを上野の底に置いてこれたかなあと気になっています。

（久保田裕美）

《うち》全体をゆっくり観た後に鍵をお渡しした20代くらいの男性、扉を開けて
「2人が寄り添ってるようにも、キスしているようにも見える。インクのにじみと灯りが、余計にそう見えるんですかねー」
しばらくその部屋を眺めた後、閉めようとされたので「扉は開けたままで」とお声がけすると、「すごくプライベートな空間なので鍵を閉めてもいいですか？次の人に見つかるまでは、そっとしておきたい」「でも誰かに開けて欲しい」とのこと。
再び鍵を閉めて、次に扉が開く時のことを楽しみに帰られました。
鍵が開くまでは秘密、そして次に来る誰かとわかちあいたい気持ち。とても素敵だなあと思いました。
私は《うち》のシフトに入るたびに、その扉が開いているか気になってしまいます。（たしか310号室）

（土屋典恵）

《うち》で出会った中国から来た日本語学校の女の子のお客さん。
寮でいろいろあったようで、三人の人が集まる絵をじっと見て私もこういった生活がしたいとぽろりとこぼしてくれました。
夜間開館中だったからか少しホームシックだった彼女の心に刺さったようです。
《うち》でその絵を見ては思い出し、彼女に良き友人ができていることを願っています。

幾つも素敵な話をお聞きすることができたのですが、特に印象的だった話を。
《うち》で鍵を開けたお家の中の親子の版画を見ていた女性に「楽しそうなお家ですね」と声をかけたところ、「私には悲しい絵に見えました」と言い涙を浮かべられていました。意外な反応に驚きつつお話を聞くと、お父様が亡くなったといったご自身の辛い体験を作品に重ねられたとのことでした。どういう言葉をかけるべきかわからず、ただ肩を撫でることしかできませんでしたが、ケエジンとして一言声をかけることが感情を表に出すきっかけとなり、その方が少しでも心が軽くなったと感じていただけたならばと思っています。
同じ絵でも人によって様々な見え方になること、そして「鍵を開ける」という行為を通じて作品が自分と特別な繋がりを感じさせ、見る人に強い感情を引き起こす力が作品にあることを感じた体験でした。

（飯田倫子）

《うち》で鍵を渡そうとしたところ、自分で開けたい家を選んでもいいですか？と仰ったので、お待ちしていると結局最初に私が渡した番号と同じ家だったとのこと。偶然ですねーと笑い合って鍵を開けたところ、じっと中をご覧になっていたのでしばらく見守っていました。声をかけたら「見たかった景色が見えました。福岡からマティス展を見にきたついでに寄ったのですが、来てよかったです。」と仰っていただき私も嬉しくなりました。別の日には扉を開けた途端「あっ！」と仰る方に理由をお聞きしたら、ちょうど今朝棚から物をおろしてきたので、同じような景色が見えて驚いたとのこと。
そのひとそれぞれの景色が見える《うち》にあたたかい灯りがだんだんと灯っていく素敵な作品だなあとケエジンをする度に感じます。

（井戸智子）

スイスのユングフラウ鉄道で車掌をやっていたという男性は、「車掌の仕事も最近はどんどん機械化されさびしくなりました。他にも戦争とか、世の中はさびしいことばかり。だけど荒木さんの作品にあるユーモアを見て、とても元気をもらいました」と言っていました。震災に関連した作品もありましたよねと言うと、その中にあるユーモラスな表現が、悲しみだけでなく、明るさを与えてくれるのだそうです。

（小野寺伸二）

沢山のエピソード一つ一つ大切で選べません…
特に《うち》はそれぞれの方が忘れていた小さい頃、若い頃の記憶が蘇り、ずっと見つめている方が多かったです。お声をかけるとそれぞれの思いだしたお話を懐かしそうにお話ししてくださり、本当ならば忘れてはいけない大切な思い出を思い出していただけてよかったなぁ、それを共有できてよかったなぁと思いました。
ある女性からいただいた「なんだか小さい頃の懐かしい写真を見ているのと同じ感覚になりますね。」という言葉が皆さんの気持ちを代表できるのかな。人の心を開くことのできる作品、すごいですよね。

（滝沢智恵子）

熱心に展示をみている二人組の女性にお声がけしたところ、荒木珠奈さんの同級生でした。長い間、ご連絡は取られていなかったようですが、この展覧会を見に、遠方から来られたそう。《うち》の作品を見ていると、自分たちが住んでいた団地の景色を思い出されたようで、とても嬉しそうに「昔、私たちが住んでいた団地って、こんな感じだったんですよねー。すごい懐かしい気持ちになるなぁ～」と、お話ししてくれました。
作品を通じて、鑑賞者の過去へ繋がった瞬間に立ち会えた気持ちがして、私もとっても嬉しかったです。

（山田理恵子）

来館される方は国、文化、来館の動機もさまざまなように、その場に居合わせるケエジンさんもいろいろ。そんな中で、そのたまたまそこにいたことで起こる出会いが、偶発から必然を感じるような場面やエピソードを見聞きすると展覧会のみえない何かを感じずにはいられませんでした。うえのの底だから？精霊のいたずらなのか？嬉しいことも、悲しいことも吐露されることで誰かと繋がれる。言葉が交わされなくても共に佇んでいるだけで、じわーっと心がつながっていく。そんな東京都美術館の空間。この空間を設計した前川國男に密かに感謝しつつ、みなさんと共に歩めた数ヶ月は私にとっても大事な記憶となりそうです。

（大川よしえ）

７月に私が初めてケエジンをした日の思い出です。中国からの旅行者（大学生）の方に鍵をお渡しして、一緒にオープン！《うち》の中の様子は、犬らしき動物と、向かいに人のシルエットの作品でした（#517のお部屋です）。「どんな風に見えますか？」と尋ねたところ、彼は「狼と老人」と即答。「エッ！狼？！」と思い、その理由を聞いたところ、中国の昔話に、老人が狼を助けたが、その狼に食べられてしまう（食べられそうになる？）、という「恩知らず」の言葉の由来になった話がある、と教えてくれました。
荒木さんの作品を通して、中国のことを知ることができたことに驚きました。改めて、アートっていいなぁ、と感じました。

（石井真理子）